

「平和と人生の考究」

An Inquiry into Peace and Life

宇野正三

Shozo Uno

1 平和とは幸福のこと

理想の社会とは、どのような社会であろうか。それを私は幸福な社会だと思う。そして、幸福とは、「人生の目的が実現して行くことにおいて生じる精神的喜び」と考える。この精神的喜びを享受している場合、我々は、他の何ものかのためでもない、それ自体に価値を覚え、満足する。すなわち、幸福は我々人間にとって、それ自体で善いものである。幸福は肉体的・感覚的喜びとしての快楽とは異なる。飢餓に苦しんでいる状況で、子供を押しつけて、パンを食べても、空腹が満たされるという快楽はあるにしても、子供にパンを与えなかった故に精神的には苦痛がある場合がある。この例で理解されるように、快楽は、直ちには幸福ではないのである。

我々がこの自体的善としての幸福な社会を実現するためには、幸福な社会を促進しようとするか或は少なくともそれを破壊することを意図しない動機による行為を行わなければならない。そのような善い行為は、どのような行為であろうか。我々は集団生活をしているのであるから、自分の行為が他人の幸福を破壊してよいのであれば、自分の幸福も他人の行為によって破壊されることもよいと認めなければならない。このような生き方は、お互いが幸福を破壊し合う結果、幸福な社会をもたらさない。したがって、私は善い行為を「他人の幸福を配慮しながら、自己の人生の目的を追求すること」と規定したい。

我々が目的を追求する過程において、意図せずとも同じ目的を持つ人と言わば競争になり、他の人が落伍する場合もあり得よう。この場合、我々はその競争をフェアに行うべきであり、その結果のランクは仕方のないものである。しかし、善い行為の規定で述べたように、我々は他人の幸福を配慮しながら生きるべきであり、術策や姦計などによって他人を蹴落とすようなことは為すべきではない。

我々の行為の善悪は動機と結果の両面から評価されるべきである。しかし、評価に当たっては動機の方が重視される。何故なら、動機は自分によって選ばれるものであるが、結果は自分以外の事情によって左右され得るからである。しかし、情勢判断の不的確さなどから、首尾よい結果を実現できないことがあり得るから、結果についても行為者に責任はあり得る。社会の幸福の破壊という悪い結果をもたらした場合、法律では刑罰の対象にな

らない場合でも、道義的責任は問われ得る場合がある。

我々は仕事上でも、趣味上でもいいから、何か目的をもつことが大事である。明確な目的をもたない人生は活気がなく、時間の貴重さも感じられず、人生の意味感が希薄になる。そのような人生は幸福を生じない。特に、仕事上の目的が実現されて行くと、自分はこの仕事をするために生まれて来たのだ、とも思われてくる。所謂、孔子の「五十にして天命を知る」¹ 心境である。

この幸福を実現するための十分条件と必要条件を考えてみよう。「幸福の十分条件」は「自己の人生の目的実現への努力とそれが実現して行くこと」であり、「幸福の必要条件」は「安全、快適」である。十分条件において、目的が実現して行くことは、その目的の達成とそれに近づいていくことの自覚を含む過程の双方を含む。目的の達成は大きな喜びであるが、達成に向かって着々と接近していくことが確認される場合、その過程も喜びをもたらす。

(1) 安全について

安全は生命の安全である。さて、我々の生命は護るに値するものであろうか。生命は何故、尊いのであろうか。生命が無くなると、少なくとも自己に関わるこの世のすべて（幸福の享受を含む）が無くなる。来世が有るかどうかは断定できない。来世がもし無ければ生命を失うことにより、自己も滅びることになる。生命は、それがあってこそ、この世でのすべての価値が成立するが故に、根本価値と言わなければならない。戦争はその生命を破壊するものであるから、根絶しなければならない。但し、自衛戦争は許される。国連憲章（第五十一条）でも国連加盟国が武力攻撃を受けた場合、自衛権を認めている。日本国憲法第九条も日本国の自衛権を否定したものではないと解する。また、戦争の手段である武器も無くしなければならない。このため、軍縮には努める必要がある。

広島・長崎両市は原爆体験から、特に核兵器の廃絶のために努力している。両市が主導する世界の都市から成る「平和市長会議」（会長—広島市長）は 2003 年から「2020 ビジョン（核兵器廃絶のための緊急行動）」を展開しており、西暦 2020 年までに世界の核兵器を無くすることを目指している。

2009 年 4 月 5 日、オバマ米国大統領が、チェコの首都プラハで演説し、米国が核兵器の無い世界の実現のために努力する決意を表明した。同大統領はこの歴史的な演説で、次のように言っている。「そして核保有国として、核兵器を使用した唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任がある。」(And as nuclear power—as a nuclear power, as the only nuclear power to have used a nuclear weapon, the United States has a moral responsibility to act.) 「したがって本日、私は核兵器の無い世界の平和と安全を追求する決意を、信念を持って明言する」(So today, I state clearly and with conviction America's commitment to seek the peace and security of a world without nuclear weapons.)

2009 年 7 月 6 日、米ロは新しい戦略兵器削減条約を締結することとし、同条約発効後、7 年以内に作戦配備の戦略核弾頭を 1, 500~1, 675 発以下まで削減する方針で合意した。

同年7月8日、イタリアでの主要8カ国（G8）首脳会議は「核兵器の無い世界に向けた状況を作ることを約束する」との声明を発表した。米国が主導することにより、核兵器廃絶に向かって世界が動き始めた。このオバマ大統領の努力を支援する意味を込めて、2009年のノーベル平和賞が同大統領に授与された。

米ロが進めていた新しい戦略兵器削減条約締結交渉が合意に達し、2010年4月8日、オバマ米大統領が核兵器廃絶演説を行ったプラハで、同大統領とメドベージェフ・ロシア大統領により同条約の調印が行われた。この条約は発効後、7年以内に米ロがそれぞれ、作戦配備の戦略核弾頭を1,550発以下まで削減することを謳っている。同条約は米ロで批准され、2011年2月5日に発効した。

現在、世界に保有されている核弾頭数は作戦配備されていないものを含めて約2万2,600発ある。圧倒的な核兵器大国である米ロが更なる核軍縮に努め、核軍縮において他の核保有国を牽引し、核兵器廃絶という正しい目標に向かって勇往邁進してもらいたい。

（2）快適について

快適な生存のためには、お互い同士の温かいいたわりが必要である。学校などでいじめが多く起こっているが、これは快適さを破壊するもので、自殺者も生んでいる。高齢者にとっても、家族らからのいたわりが大切である。人間は傷つきやすい生き物であり、お互いの幸せへの配慮が必要である。

快樂と快適の違いは、快樂は喉の渇きが水を飲んで癒された場合に生じるような肉体的・感覚的喜悦であり、これに対して快適は、より精神的なもので、愉快さ、或は少なくとも不愉快さの無いことである。

安全や快適には程度があり、それらの完全な実現は不可能と言われよう。しかし、ある程度の安全や快適さがあれば、人は幸福を感じるものであり、可能な限りその程度を高めて行くことが肝要である。政治的、社会的、経済的差別や環境破壊等の諸問題も、安全や快適に係わるから、安全で快適な社会の実現という課題の中に包含し得る。

2 ^{あんじん}安心の確立

人生の目的を実現しながら幸福を獲得しても、人はそれだけでは完全には満足できず、さらに、安心＝心の安らかさが求められる。仏教では、このような心の状態を涅槃と呼んでいる。極楽浄土に往くとは、安心を確立したことを意味している。安心は死後にではなく、生きている間に確立することが望ましい。死後の世界があるとすれば、心は続いているから、生きている間に確立した安心の境地は、そのまま持って往ける。このような境地を獲得する方法はいくつもある。仏教では、南無阿弥陀仏と称える念仏、坐禅、南無妙法蓮華経と唱える唱題などがある。ここでは、浄土系の思想を取り上げて、安心の境地を実

現する道を探求してみよう。

『無量壽經』によると、法蔵比丘が人々を救うために四十八の本願を立てて修行して阿彌陀仏に成ったとされる。阿彌陀仏とはサンスクリット語の語義に基づけば、「無限の存在者」のことである。この成仏により、この本願は、その内容を実現する力をもつものとなり、その力は本願力と言われる。この物語は、神仏が精神性をもっており、人々を救いたいという願いとそれを叶える力をもっていることを示している。

無限の存在者は古来、神とか仏とか称されてきた。神仏は無限定のものである。限定されたものは、限りがあるから有限のものたらざるを得ないからである。ここで現象界での変化を考えてみよう。A→Bの変化は如何にして成立し得るであろうか。この現象は不連続の連続である。では、連続しているものは何であろうか。それをMとして、仮にこれを限定されているものとしてみよう。AもBもMを含むことになるが、Mが限定されているものである場合は、AもBも純粹のそれらではなく、例えば、A´やB´となってしまう。これではA→Bの変化を考察することにはならない。故に、Mは無限定のものでなければならぬ。このMがAとして現れ、次いでBとして現れることにおいてA→Bの変化が成立し得る。A、Bは神仏が自己を限定的に表現しているとも見ることも出来る。したがって、森羅万象は神仏の現れ＝表れである。現象界には、心も存在し、そのような心を生み出す神仏には何らかの精神性が存すると考えざるを得ない。神仏が本願や本願力をもっていることは十分に成立し得るのである。

法然上人は中国の善導大師の影響を受けて、阿彌陀仏の本願の中で第十八願^{かなめ}を要と考へ、この願を「念仏往生の願」と称している。『無量壽經』で説かれる第十八願の内容は次の通りである。「たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂^{しんぎょう}（信じて歡喜が生じること）し、わが國に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし生まれずんば、正覺を取らじ。」² 善導大師はこの本願を言い換えて、「もし、われ成佛せんに、十方の衆生、我が國に生まれんと願ひ、我が名字を稱して下十聲^{しもじっしょう}に至らん、我が願力に乗じて、もし生まれずんば正覺^{しやうかく}を取らじ」³ と述べ、念仏を口稱念仏を意味すると明示した。法然上人もこの立場を継承した。特に、法然上人が念仏こそ阿彌陀仏の本願の中心であり、他の行^{ぎょう}は特に末法の時代においては往生に導かないとの立場を確立したのは、次の善導のことばが決定的であった。すなわち、「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥、時節の久近^{くじん}を問わず（時間の長短を問わず）、念念に（絶えず念仏して）捨てざるは、是れを正定^{しやうじやう}の業^{ごう}（極樂への往生をもたらす正しい因として阿彌陀仏によって定められた行為）と名づく。彼の佛願に順ずるが故に。」⁴ 法然上人は この立場を受け継ぎ、「正定の業とは、即ちこれ佛名を稱するなり。名を稱すれば、必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故なり」⁵ と言っている。

仏教では我々の行為を身口意^{しんくゐ}の三業から考える。阿彌陀仏の本願への帰依の心を全身的に表すには、身口意の三つの面が具わらなければならない。故に、念仏を、本願への信を持って、口で称える業と解することは妥当である。

念仏にも自力の念仏と他力の念仏がある。阿彌陀仏の本願をいただく心で称える念仏は

他力の念仏である。法然上人は次のように言っている。「ただ（只）一念二念とな（唱）ふとも自力の心ならん人は、自力の念佛とすべし。千遍、萬遍をとな（唱）ふとも、百日、千日、よる（夜）ひる（晝）はけ（勵）みつとむとも、ひとへ（偏）に願力をたの（憑）み、他力をあふ（仰）きたらん人の念佛は聲々念々しかなから（併）他力の念佛にてある（有）へし」。6 法然上人は阿弥陀仏の本願力に憑って南無阿弥陀仏と称える他力の念仏によって極楽浄土への往生が可能になるとする。「念佛ヲ申テ往生ヲ願ハム人ハ、自力ニテ往生スヘキニハアラ（非）ス。タタ（但）他力ノ往生也」。7

法然上人は本願への信心と念仏の行の両方が往生には必要だと強調している。「名號をきくといふとも、信ぜずば聞かざるが如し。たとへ信ずと云とも、唱へずば信ぜざるが如し。只つねに念佛すべし」。8

弟子の親鸞聖人は、ひたすら師の法然上人の教えに随順した。

親鸞聖人は言っている。「親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと（阿弥陀仏の御本願のお力をいただく心で、ひたすら念仏を称えれば、極楽浄土に生まれることができるとの）、よきひと（法然上人）のおほせをかふりて（お教えを受けて、そのとおりに）信ずるほかに別の子細（わけ）なきなり。」9「他力真実のむね（趣旨）をあかせるもろもろの正教は、本願を信じ念佛まふさば佛になる、そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや（往生に必要であろうか）。」10「他力と言ふは、如来の本願力なり。」11「彌陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 攝取不捨（阿弥陀仏が衆生を救い、捨てないこと）の利益にて无上覺をばさとするなり。」12「往生すといふは不退轉に住するをいふ、不退轉に住すといふはすなはち正定聚のくらみにさだまるなり、成等正覺（悟りを開くこと）ともいへり。これを即得往生といふなり。」13「如来の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに不退のくらみにさだまる（浄土に生まれ、凡夫に退転しないことが決まっていること）と御こころえさふらふべし。」14「彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極楽へむかへんとかはせたまひたるをふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり（賞讃すべきことである）、信心ありとも、名號をとなへざらんは（南無阿弥陀仏と称えなければ）詮なくそうろう（役に立たない）。また一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたくさふらふ。」15 法然上人も親鸞聖人も本願を信じる信心と口称念仏の行の両方が往生には必要だと高調している。

では、極楽浄土に往生するとは如何なることであろうか。

仏教は釈尊の悟りから始まった。釈尊は29歳で出家して、6年間修行し、35歳で正覺を成じた。成道後、釈尊は鹿野苑で、以前、共に修行していた五人の修行者に初転法輪と言われる最初の説法を行った。そこで、釈尊は四諦（四つの真理）の教えを説いた。すなわち、①苦諦（迷いの生存は苦であるという真理）②集諦（苦の原因は人間の欲にあるという真理）③滅諦（悟りの境地は安らぎの心境＝涅槃の境地であるという真理）④道諦（悟りを実現するために八つの正しい修行の道＝八正道があるという真理）。

仏教の目的は悟りを開いて、成仏することである。その悟りの境地とは、四諦の教えに

見られるように、欲に支配されない自由を得た安らぎの境地＝涅槃の境地に他ならない。

『勝鬘經』には「阿耨多羅三藐三菩提（最高の悟り）とは、即ち是れ涅槃界、涅槃界とは、即ち是れ如来の法身（無限の真実在）なり」16 とある。『大般涅槃經』にも、「如来は、即ち是れ涅槃なり」17 と説かれている。阿弥陀仏は本願が成就した結果、仏になった報仏とされるが、意味からすれば無限の存在者であるので、法身如来に他ならない。法身如来＝阿弥陀仏そのものが涅槃の世界であり、極楽とは阿弥陀仏の悟りの世界を意味しているのである。また、極楽浄土は阿弥陀仏の本願が実現した報土であるが、その国土自体が、安楽の国土として涅槃の世界であるから、阿弥陀仏＝極楽と言わなければならない。『無量壽經』には「かの佛国土、清浄安穩にして、微妙快樂なり。無為泥洹の道に次し（涅槃の境地のようである）。」18 とある。『阿彌陀經』は、「舍利弗よ、かの土、何が故に、名づけて極楽とする。その国の衆生、衆苦あることなく、ただ諸樂のみを受く。故に極楽と名づく。」

19

悟りを開けば、苦しみの生存を克服して、安らかな生存を獲得するのであるから、極楽とは悟りの結果得られる涅槃の境地に他ならない。善導大師も「極楽は無為涅槃界なり」20 と言っている。故に、この極楽に生まれる＝往生するとは、悟りを開くことに他ならない。禅門で初めて悟りが開かれることを「見性」と謂うが、浄土系の思想では、この体験を阿弥陀仏乃至本願への信心の確立＝信心決定と謂う。信心を獲得場合、阿弥陀仏の存在への気づきが起り、これは悟りと謂うことが出来る。これにより、我々は阿弥陀仏或は神仏との一体感をもつことができる。この時、「手の舞い、足の踏む所を知らず」などと形容される歡喜が生じる。見性によって、迷いの段階を脱して、覺者の位に入る。この位は、成仏に向かう菩薩の修行の道程を十段階に分けた十地の初地とされ、歡喜地と称される。『華嚴經』は次のように説いている。「佛子よ、菩薩は始めて是の如きの心を發せば、即ち凡天地を超ゆることを得て菩薩の位に入り、如来の家に生まれ、能く其の種族の過失を説くこと無く、世間の趣きを離れて出世（迷いの世界を脱し、悟りの境地に入ること）の道に入り、菩薩の法を得、菩薩の處に住し、三世（過去世、現在世、未來世）の平等に入り、如来種の中に於いて決定して當に無上菩提を得べし。菩薩は是の如きの法に住するを菩薩の歡喜地に住すと名づく、不動と相応する（間違つた説によって動かされないこと）を以ての故なり。」21 法然上人は、「歡喜とは、往生決定と思ふ故に喜ぶ心なり」22 と述べている。

『阿彌陀經』は、「舍利弗よ、極楽国土には、衆生生まれん者、みな是れ阿鞞跋致なり。その中に、多く一生補處あり」23 と説いている。阿鞞跋致とは不退とも言われ、悟りを開いて、もはや迷いの世界に後退しない位を意味する。正定聚も同じ意味である。一生補處とは、菩薩の修行の階梯で最高の段階で、次の生では仏に成れる等覺の位のことである。このように、浄土には様々な悟りの段階の住人がいることが理解される。信心が定まる（阿弥陀仏の存在に気づく）と安心が生まれるので、極楽浄土に入るわけであるが、それで究竟ではなく、その後も、念仏などにより境地は深まり、進展する。極楽に往生しても、成仏

を目指して仏道修行は孜々続行されなければならない。

人間の行動は自分の性格によって動かされている。性格を変えなければ行動は変えられない。行動をすると、心に習気（習慣性）が付く。毎日、散歩をしていれば、しないと心が落ち着かない。これは散歩する習慣が形成されているからである。悪い行為が心に薫習する悪い習気を取らないと、理想的な生き方は出来ない。念仏を称え、阿弥陀仏の本願力をいただくことにより、悪い習気が取れていく。こうして心が純白になって行き、仏に近づいていく。信心が定まっても、すぐに仏に成れるわけではない。

3 個人の救いと世界の平和の実現

我々は何か目的（その数はいくつでもよい）を持って、その実現に努め、その達成の過程において幸福を味わう。なおかつ、安心の境地を確立すれば、生きながら、浄土の住人となることができる。地位も名誉も富も手にして、世間的に成功者である人たちの中にも、この安心の境地を獲得している人は少ない。幸福であっても安心を得ていないと、人生に対する完全な満足は存在しない。故に、個人の救いには安心の確立が望まれる。勿論、人には絶対者に到達したいとの宗教的欲求があり、安心はこの欲求が達成されたことから生じるもの故に、これも幸福である。この幸福は世間的な意味での幸福ではないので、宗教的幸福＝宗教的満足感と言うことが出来る。この幸福を浄福とも称する。

一方、世界の情勢を見ると、冷戦は一部の地域を除いて終焉したが、現在も宗教の違いに淵源する争いが多発している。宗教の違いから何故紛争が生じるかと言うと、他の宗教の教義の否定がその信徒の人格の過小評価や蔑視にも至り、その結果、政治的、社会的、経済的差別などをもたらすからである。その場合、党派心が加わると、これらの差別は一層激化する。このような差別が起こらなければ、宗教の違いは人々の間に対立を惹起しない。しかし、宗教に起因する紛争を無くするために、異教徒に対する寛容を説くだけでは寛容的心性の醸成も容易でなく、差別に起因する敵対的態度を払拭することは困難である。この敵対意識を克服するためには、宗教間に共通の地平を開拓する必要がある。私は宗教の本質は神仏との一体感であると考え。神仏との一体感は、あらゆる宗教に普遍的基盤を提供するものである。この基盤に立脚すれば、相対的な教義の違いを突破した次元が開け、教義の相違を超克することが出来、敵対関係の乗り越えが可能になる。

安心の確立は個人の救いのみでなく、世界の平和の実現にも寄与するのである。

註

- 1 『論語』為政
- 2 『無量壽經』、大正蔵第十二卷、268 頁上
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 3 善導『観念法門』、大正蔵第四十七卷、27 頁上

- 4 善導かんわりようじほきやうしよ『觀無量壽經疏』、大正藏第三十七卷、272 頁中
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 5 法然せんちやく『選擇本願念佛集』、石井教道編、昭和新修法然上人全集、平樂寺書店、1979、
347 頁
- 6 法然しちかじよう きしやうもん『七箇條の起請文』、同、811 頁
- 7 法然『法然聖人御說法事』、同、218 頁
- 8 法然『常に仰せられるける御詞』、同、490 頁
- 9 親鸞かんにしやう『歎異抄』、真宗聖教全書編纂所編、真宗聖教全書二宗祖部、大八木興文堂、1994、
774 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 10 同書、780 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 11 親鸞『教行信證』、真宗聖教全書編纂所編、真宗聖教全書二宗祖部、大八木興文堂、
1994、35 頁
- 12 親鸞『正像末和讃』、同、516 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 13 親鸞『唯信鈔文意』、同、625 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 14 親鸞『末燈鈔』、同、666 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 15 同書、672－673 頁
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 16 『勝鬘經』、大正藏第十二卷、220 頁下
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 17 『大般涅槃經』(四十卷)、大正藏十二卷、395 頁下
- 18 『無量壽經』、大正藏第十二卷、271 頁下
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 19 『阿彌陀經』、大正藏第十二卷、346 頁下
- 20 善導『法事讃』、大正藏第四十七卷、433 頁中
- 21 『華嚴經』(八十卷)、大正藏第十卷、181 頁上
丸括弧内の文言は筆者による説明。
- 22 法然さんじんりやうけん『三心料簡および御法語』、石井教道編、昭和新修法然上人全集、平樂寺書店、
1979、451 頁
- 23 『阿彌陀經』、大正藏第十二卷、347 頁中

(広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター研究成果報告書『ぶらくしす』2010年度 通巻12号掲載論文)